

情報リテラシー教育における最新動向について

— 大学情報リテラシー教育担当者研修報告 —

藤 岡 豊

平成21年10月21日から23日の3日間、NII主催・大阪大学図書館共催の学術情報リテラシー教育担当者研修に参加した。会場となる大阪大学図書館には西日本の54の大学・研究機関等の図書館における利用指導の担当者が集まる。東京のNII会場でも同時期に東日本の各図書館から同数の担当者を募集して開催しており、この領域では最大規模の研修会である。学術情報リテラシー教育体制についての企画・運営、昨今の動向、利用者への指導内容・方法等について、講義や意見交換、グループ討議・その成果発表を通して、理論の習得からワークショップによる即応的实践に至るまで多面的に構成された研修であった。意義深く感じた講義を中心に部分的ではあるが報告したい。

× ×

1. 「学術情報リテラシー教育の理論と動向」

(講師：青山大学文学部教育学科 野末俊比古氏)

野末氏は研修全体のコーディネーターであり、東京と大阪の2回の講習会の司会進行およびコメントを務める。野末氏自身の講演は、大学図書館は情報リテラシー教育をどうとらえて、どのように展開させるかについて考察を行い、実例を踏まえてその理論を展開しながら、今回の講習全体を見渡すものであった。そのため基調講演ともいべき内容であり、至るところにキーコンセプトが散りばめられ、後続の講演中にも振り返り参照することが多かった。

要約すると、大学図書館が情報リテラシー教育を取り扱うことは、利用者となる教員や学生の知識社会に参画してその質的向上を支援することであり、大学の知的活動の中に図書館が提供するリソースを位置づけることになる。この中で利用指導がとるべき在り方が変化・拡大し、以前であれば図書館のプロパーとしての立場から実施してきたところの利用指導について、昨今では大学全体（もしくは大学内に個々に存在する他の有力な事業）のプログラムに

接続できるような体系やスケーラビリティを持つ企画や運用方法が受け入れられて高次の展開を持つようになった。こうした図書館から外部を志向して発信する利用指導のあり方を「指導サービス」と呼ぶことにする。一方、上位組織のシステムに載せる接点のない閉じた自己完結的な体制では意義が失われるため、指導内容や方法も旧来のものから見直しを迫られることになる。

例えば、文献検索法といった図書館内だけで完結するマニュアルを教えるようなやり方では、グーグル検索が主流となった今日の学生には見向きもされない。このような図書館の利用指導行事が抱えている閉塞的な状況から脱出するための転換のポイントは、学生たちの課題の解決に役立つメニューを紹介することにある。具体化すると、グーグル検索を万能と錯覚する学生に、その限界や陥穽を指摘し、オーソライズされた学術情報の大切さを教え、それを実地の場（ゼミ発表やディベートやフィールドワークといった様々な実践の機会が学生たちには課せられている）で有効かつ戦略的に活用する方法を伝授する、ということになるだろう。

もちろん大学や図書館ごとに事情が異なるので、一律に方法が決まるわけではないが、評価を重視するマーケティング（PR活動）やPDCAサイクルなどのマネジメントの手法を用いて、個別に存在する社会的要因・制約・条件を考慮しながら検討して改善し進めていくことで、行き詰った利用指導から、多様なバリエーションを展開し得る「指導サービス」となり、問題解決への糸口を探る契機になるのではないかと、として積極的な実践のための方法を提起されていた。

× ×

2. 「教員と図書館員の連携による学術情報

リテラシー教育」

(講師：三重大学高等教育創造開発センター
長澤多代氏)

長澤氏は三重大学に移られる前の長崎大学に籍を置かれていたときから、教学側の立場から図書館員との連携に重きを置いたファカルティ・デベロップメントの構想を提起されてきた方で、特に米国の大学図書館の先進的な教学との連携事例を紹介するための研究を続けておられる。

まず日本の大学における重要な問題として、教育の質的保証に関する問題において単位制度の実質化が定着していないことを挙げる。

「1単位」とは教員が教室等で授業を行う時間と学生が事前・事後に教室外において準備学習・復習を行う時間の合計で標準45時間の学修を要する学習内容のことを指す。つまり、かなり多くの時間を学生の自主的な準備学習・復習に費やすよう求められている。

しかし、実態はこの理念には程遠いものであることは容易に想像できるところであろう。文部省や内閣府の行った学習時間に関する最近の調査でも、そうした不全な状況が検証された。また、国際的な成績評価のあり方についての比較でも、日本の単位制が諸外国に比べて立ち遅れている（欧米の大学や高校などではより厳密なGPA = Grade Point Averageという成績評価法が一般的に使われている）ことが知られるようになり日本のなまぬるい事態を重く見る傾向が強まってきた。

そのような反省から、単位を実質化させるためにファカルティ・デベロップメントの場でも、大学教員がなすべき役割として、授業外学習を促すような授業方法を導入することが推奨されるようになった。それとともに、大学全体でも役割・授業外の学習環境を支える体制の整備、つまり図書館などの物理的・人的支援環境やeラーニングなどの仮想的支援環境等が注目されるようになった。

この問題で長澤氏は、大学図書館の果たすべき役割とそのための実践の方策は、かなり大きな範囲にわたるといふ。具体的には、――

• 学習成果の向上

- 初年次教育科目における図書館ガイダンス
- 指定図書、図書探索クイズ等を介した課題解決型指導の推進
- 科目関連の情報利用指導などの学習支援

• 施設環境の整備

ラーニング・コモンズ

• ファカルティ・デベロップメント等による教員への支援

新任教員オリエンテーション、ワークショップなどの教育支援

• スタッフ・デベロップメントによる専門性の向上

求められる専門能力の検討と資質開発

——といった具合である。

特に、平成20年の中央教育審議会答申『学士過程教育の構築に向けて』が出されて以降、文部科学省が推進する「学士力」養成としての大学の機能が注目されている中で、1年次生を対象とする初年次教育における「初年次セミナー」という指導機会には、全入時代で多様化した学生をスムーズに高校から大学へ組み入れるための最も注力すべきであるとされる。そこでは図書館の利用法に留まらず、大学生活における学習時間の作り方や課題解決のスキル向上に資する指導プログラムを図書館と教学が協同して企画し、図書館利用指導を組み込んだ授業として設置するのが望ましいとされた。

このあと氏は、米国の教育改革における先進的な大学とその図書館の例を挙げ、そこで実践されてきた、学内の諸機関と大学図書館の密接な協同体制を推進してゆくための取り組みの段階・手順を示したロードマップを取り上げて紹介するなど、利用指導の運営の具体的な内容を解説した。

× ×

5. 「大学における教授法のノウハウ」

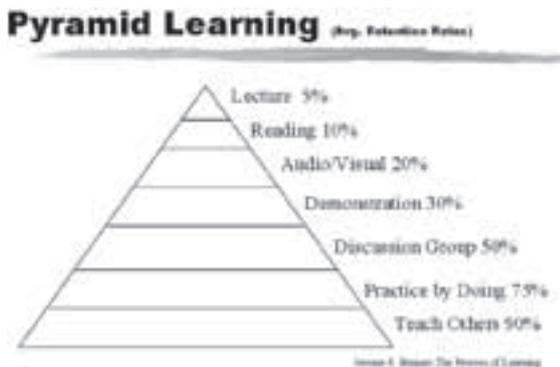
(講師：名古屋大学高等教育研究センター
中井俊樹氏)

中井氏は名古屋大学の教育活動改善を担当されている方で、教育学で高等教育教授法を専門とされている。高等教育研究センターでファカルティ・デベロップメントの成果として発表・刊行されている小冊子「ティップス先生シリーズ」の制作メンバーの一人である。この冊子の刊行にあたって、学内を調査し、優れた教育実践を精選したところたいへん分量になったが、そこから導き出される提言が効果的に伝わるように極力無駄をそぎ落とし最小限のメッセージに絞り込んだという。この冊子はウェブでも公開されているので、ぜひ読んでみてほしい。

さて、レクチャーは、どのようなときに学生たち

はより学ぶのか、という教育の効果がテーマの講演であった。氏は自らの講演を進めるにあたって、途中で2回グループワーク形式と呼ぶ、課題によるグループ討論とその成果発表の場を設けることで、このレクチャーの結論となる提言が、そのまま今回の講演の中で実践されていて、その効果を受講者が体得・実感できるように仕組まれていた。

例えば、学習方法の効率を考えるうえで、最も示唆的なのが、図の「ラーニングピラミッド」である。



「ラーニングピラミッド」の概念図

これは、

- 「講義を受ける」
- 「本を読む」
- 「視聴覚機器教材で学ぶ」
- 「デモンストレーションをする」
- 「グループディスカッションをする」
- 「実際に行ってみる」
- 「学んだことを他の人に教える」

という7つの学習スタイルが、その効果性の順に低いものから高いものへと並べて位置づけられている。特に、後ろの4つは、参加型学習や課題解決型学習と言えるもので、能動的で実践的な方法内容である。

こうした実践的な場面を効果的に利用指導の場に挿入しながら進めるのが肝要である。他にも念入りの講義計画や、使用道具の検討、威圧的にならないような快適な雰囲気づくり、学生のコミュニティに受け入れられるようなメディア発信や、受講生の心的障壁を下げるためのイラストレーションの導入（図書館の「ゆるキャラ」作り等を含む）など、ガイダンスに取り入れたいと思うスキルやストラテジーが満載であった。

こうしたモチーフの提案にインスパイアされたためか、続くワークショップの実践では、受講者の図

書館職員は、「あ、ツイッターでそれをやってみよ」とか、「ああ、プレゼンのモニター画面の中だけじゃなくて、外にも教材を置いて注目させれば、訴求力が上がるんじゃないか」といったように、先の講義が至るところで想像力の源泉になっていたように思われた。氏の掲げる教育の効果が、すぐさま発揮されているような印象的な講演であった。

× ×

以上、研究者の発表を中心に紹介してきたが、他にも図書館職員による事例紹介を中心とした発表も多くあり、中でも千葉大学附属図書館のリエゾンライブラリアンと呼ばれる教学連携を身上とする図書館員による、授業科目ごとに制作されたパスファインダーが心に残った。通常、図書館はパスファインダーを主要な主題ごとに提供するのがほとんどだが、ここでは教養科目のほとんどの科目ごとに「授業資料ナビゲーター」と呼ばれるパスファインダーが用意されていて、図書館資料や文献データベースが丁寧なガイド文書付きで紹介されている。米国に先駆例があるようだが、科目ごとに先生方とメールで連絡をとりながら作成しているというコミュニケーション重視のスタイルには、瞠目すべきものがあるように思われた。

× ×

この研修の最後に、会場となる大阪大学図書館の企画課長である片山俊治氏により閉式の辞があったのだが、その中で今回の研修の成果の実践は、図書館に相当困難な問題をつきつけており、どこの図書館でもこうした理想的な利用指導體制の具現化は容易ではないはずだ、という旨のことを指摘して総括されていた。

現状改善に即して考えると、例えばファカルティ・デベロップメントの場で提案されているような情報リテラシー指導を含む図書館利用法講習を図書館側が担っていくとなると、企画や運営に多くの時間を割くことになり、とても一度に急には立ち行かないと思う。講義ではいくつかステップを区切って段階的に漸進的に進めるとか、各館ごとに諸条件を踏まえてローカライズしながら進めるといったオプションがあることが強調されていた。しかし、それにしても事態はますます複雑化するばかりで、思わず「何から手をつけりゃいいんだ」と唸らずにはいられないのが実情である。各論では良いヒントがたくさん

得られたが、(問題解決の困難さがクリアになったのかもしれないが、その分、) マクロな視点で考えると問題が際立ってますます焦りを覚えるのであった。

今回の研修の受講にあたり、ご協力いただきました関係者の方に厚くお礼を申し上げます。

(ふじおか ゆたか 図書館事務室)

×

×